

国語

第一問

次の本文を読んで、以下の設問に答えなさい。

時間 六〇分 配点 一〇〇点

冬の雨は、一気に夕暮れを引き寄せるように小暗く降る。大降りにはならない。音がしなくなったと思っていると、雪が舞っていることもある。冬の雨で代表的なものは「時雨」である。晩秋初冬に降ったり止んだりする通り雨だが、その冬初めて降る時雨を「初時雨」という。

旅人と我名よばれん初しぐれ 芭蕉

① 芭蕉が伊賀に帰郷する折りの句である。「旅人」という名で今日から自分は呼ばれて行くのだ、という決意を示している。折しもこの冬初めての時雨が掠（かす）っていった。道中尾張、美濃などに知人の多い旅であつたから、わずかばかり時雨に濡（ぬ）れようと心躍ったのである。② 陰暦十月十二日の芭蕉忌を「時雨忌」という。

私は四国にお遍路の旅に出たとき、この句が念頭にあつて、お遍路とわが名呼ばれし敷椿（やぶつばき）と作つた。新しい白装束で歩きはじめると、すぐに土地の人からお遍路さんと呼ばれて少し恥ずかしかつた。

時雨は詩心の始動する趣の深い雨で、時分によつて「朝時雨」「夕時雨」「小夜時雨」と呼ばれる。ひとところだけ降る「片時雨」、いつとき強く降る「村時雨」、横から吹きつける「横時雨」、北寄りの「北時雨」、京都北山の「北山時雨」などが知られている。京都の貴船で時雨にあつたとき、止んだと思つたら、小さな虹が林の向うにかかつた。

I

元旦、または三が日に降る雨や雪は「御降（おさがり）」という。「おふり」といわないの

は正月早々「お古」に聞こえたり、涙を連想させたりするのを忌むからだという。元旦に汲む水は「若水」である。その水で手や顔を洗うことは「初手水」ではつてみず、または、はつ A、という。これで正月の人になるわけだ。

寒の内 立春前の約三十日の水は「寒の水」といい、微生物も何も寒さに死に絶えているわけだから、清潔きわまりない。むかしは餅（もち）が黴（か）びないように、水につけて、水餅にしていた。形は崩れやすくなるが、冷蔵庫のない時代の知恵だつた。寒の水で酒を醸造（かんづくり）することを「寒造」という。しかし「新酒」「古酒」は、③ 秋の季語である。

「寒の雨」は寒の内の雨で、とくに寒に入つて九日目（月十三日ころ）に降る雨を「寒九の雨」と呼んだ。豊年の兆しとされるが、米どころの雪国ではおおかた雪だろう。

II

「霰（みぞれ）」は雨まじりの雪で、「氷雨」ともいう。津軽の人は「ぬれ雪」というそうだ。岩手県花巻の人だつた④ 宮沢賢治は「みぞれはびちよびちよふってくる」「永訣の朝」と描写している。死の床の妹は「あめゆじゆとてちてけんじや」「あめゆきとつてきてください」と兄に頼むのだが、霰（みぞれ）のことは「あめゆじゆ」と言つたのだろうか。

「霰（あられ）」は雪の結晶に水滴が付いて凍り、小さな氷の塊（かたまり）がぱらぱらと音を立てて降ってくるもの。「玉霰（りっか）」は美称である。なお、「雹（ひょう）」は積乱雲から降ってくる氷塊で、夏の季語。霰よりも大きく、ピンポン玉ほどになることもある。学校の窓ガラスが割れたりして、生徒が負傷したこともある。

さて「雪」は、水蒸気が上空で冷却・昇華し、結晶となつて降ってくるもの。結晶の形から雪のことを「六花（りっか）」や「雪華」という。雪 B「花」といつて自然美を代表する一つである。

III

「初雪」は晩秋初冬に初めて降る雪。「根雪」は最後まで解けずに残る雪。雪国

の人は、根雪になるだろう雪が降ってくるときは淋しいそつだ。

沫泡雪は泡のように消えやすい雪。綿雪は綿をちぎったような雪。

小米雪は細かい雪、粉雪。小雪は粉のようにさらさら降る雪。深雪は

深くつもった雪だが、美称でもある。

風花

は晴天にちらつく雪。雪をかぶった山から吹いてくるが、一片の雪雲

から舞い降りることもある。

IV

雪を珍しがつて見たり遊んだりする人たちのいる一方で、雪国に暮らす人たちにとっては、雪は悪いものであり、白魔である。ずいぶん前の冬、雪を見ながら歌仙連句を巻こうと新潟に遊びに行ったことがあるが、海辺に雪捨て場

という大きな看板があつて驚いた。私ときたらそれを雪捨て場と読み違えて怖い思いをした。しかし魔であつてみれば、壺もそんなに遠いものではない。

AI

歳時記には面白い季語もあつて、雪女などは

C

をつかれる。雪女郎

ともいい、民話や伝説に伝えられる雪の精である。若い女なのに白髪だとか、顔がのつぱらぼうだから振り向かないとか、雪山に迷った男に冷たい息を吹きかけて凍死させるとか、それらしく言われている。小説家・俳人の真鍋呉夫（一九二〇～二〇二二）には雪女という句集がある。同書から一句。

雪女ちよつと眇であつたといふ

高橋順子 束のなまえより、（一部改変。）

問1 傍線部① 芭蕉に関する説明で誤っているものを選び、その番号をマ

クしなさい。

① 江戸時代前期に栄えた元禄文化の担い手の一人と見なされる。

② 江戸に下ってから、深川に庵を結んで独自の俳諧に専心した

③ おくのほそ道の旅は一人旅ではなく同行者を伴った。

④ 旅の足跡は東北地方から九州四国にまで、ほぼ全国に及ぶ。

⑤ 多くの弟子門人を育成して、自派の宣伝と普及につとめた。

問2 傍線部② 陰暦十月の異称を、左の例を参考にして解答欄に漢字で書き

なさい。

例 陰暦十二月：師走

問3 空欄Aには、手水の読み方が入る。解答欄にひらがなで書きな

さい。

問4 傍線部③ 秋の季語ではないものを選び、その番号をマークしなさい。

① 名月や故郷遠き影法師 漱石

② 朝顔に釣瓶とられてもらひ水 千代女

③ 大なるものが過ぎ行く野分かな 虚子

④ 狩衣の袖のうら這うは 蕪村

⑤ うつくしや障子の穴の天の川 一茶

問5 傍線部④ 宮沢賢治の作品を選び、その番号をマークしなさい。

① 春と修羅 ② 在りし日の歌 ③ 月下の一群

④ 悲しき玩具 ⑤ 邪宗門

問6 空欄Bに入るものとして最もふさわしいものを選び、その番号をマ

クしなさい。

- ① 夜 ② 月 ③ 星 ④ 夢 ⑤ 恋

問7 空欄 C に入る語として最もふさわしいものを選び、その番号をマークしなさい。

- ① 胸 ② 魂 ③ 気 ④ 心 ⑤ 虚

問8 問題文からは次の一文が脱落している。文中の **Ⅰ**、**Ⅱ**のどこに挿入するのが最も適当か。その番号を選び、マークしなさい。

歳時記は京都の気候に合わせて編まれたものだということが分かる。

- ① **Ⅰ** ② **Ⅱ** ③ **Ⅲ** ④ **Ⅳ** ⑤ **Ⅴ**

問9 問題文の内容と一致するものを選び、その番号をマークしなさい。

- ① 若くしてこの世を去った宮沢賢治は、後に残る妹に向けての詩を書いた。
 ② 雪女や雪女郎のような季語を用いて句を作ることは慎むべきだ。
 ③ 気象を意味する「曇」「霰」「霽」の三つは、いずれも冬の季語である。
 ④ 時雨が詩心の発動する趣の深い雨なのは、雨上がりに虹がかかるからだ。
 ⑤ 特別な時期に降る雨や雪が、人々にとって信仰の対象になることもある。

第一問

次の本文を読んで、以下の設問に答えなさい。

自動詞と他動詞

自分と他人、というテーマは大きい。大きいのですぐには切り込めない。いろんな自分がある。自力と他力も。ふと、ある場面が思い浮かび、まずボクシン

グのスパーリングみたいな気持ちで、自動詞と他動詞を相手に考えてみることにした。

伝えると伝わる

患者さんの病気ががんだと分かった時、医師はその事実をどう患者さんに届けるか。いわゆる「がんの告知」のことだ。二〇一四年の今なら、ほぼ率直に事実を説明し、手術や抗がん剤療法や放射線療法について説明する。治療の時期は過ぎたと医師が判断した時は、緩和ケアについても説明する。一九七四年、今から四〇年前はどうだったか。ほぼ率直に嘘のことを説明した。大丈夫、心配しないで、がんじゃない、治る。胃がんは胃潰瘍、肝がんは肝硬変、肺がんは肺線維症。せめて嘘をつくのが医者^{いかりよう}の礼儀だった。

がんは告げるのが正しいのか、嘘をつくのが正しいのか。そんな問いがそのころの自分の中にあつた。もう一つ、それ以前に気になったのが「告知」という言葉そのものだった。何か、ひっかかるものがあつた。「告知」に「告知知らしむ」のような①イバ^{いば}った響きを覚えた。「宣告」よりましとは言え、上下語に思えた。

水平語でこの事実を分かち合えないか。

そのころ、外科医から紹介になって受け持った、進行胃がんの女性^{とつさ}の患者さんのことを思い出す。廊下ではったり出会った。外科医からは何も聞いてない。がんでないならがんでないと、はっきり言つて」と詰め寄られた。ええ、がんじゃありません」と、瞬迷い、咄嗟に嘘をついた。ああよかった。その一言が聞きたかった。女性はそのあと家族を呼び、お葬式のこと、お墓のことを話していた。

I この体験は一つのことを考えさせた。ぼくは嘘をついた。にもかかわらず、患者さんは別の何かをキャッチし、がんを承知されたようなのだった。不思議な体験だった。

宣告」より「告知」、告知」より「告げる」がやわらかいな、などと頭を巡

らせているころ、また別の患者さんに出会った。三五年前、故郷の鳥取の総合病院で勤務医を始めて間もないころ、山陰海岸で民宿をやっているという女性を新患外来で診た。その人は、よくあんなボロイ民宿に嫁に行くな、と言われながらご主人と力を合わせ、はやる民宿にしたそう。だ。がんにならぬよう、二人でタンポポのお茶を飲んできたそう。心窩部しんかぶの不快と体重減少を訴えた。裏の岩山のキノコ取りの仲間のおばあさんから「顔色が悪い」と言われ受診した。すぐ胃カメラ検査をした。ひと目で分かる進行胃がん。病名は告げず、「いずれにしても手術を受けましょう」と言った。数日後、娘が働いている関西の病院で手術を受けたい、紹介状を書いて欲しいと依頼された。紹介状を書いた。

三カ月後、当直していると、一人の女性が救急車で運ばれてきた。あの民宿の女性だった。術後の癒着性腸閉塞へいそくをおこしていた。病状が落ち着いたところのある日の回診で、先生、私、がんばったんです」と女性は言った。どうして知りましたか？ 向こうの病院の主治医からですか？と尋ねてみた。いいえ。看護婦さんから？。いいえ。

どうして自分の病名を、誰から聞いたのだろう。こうだった。手術が終わって一週間がたち、点滴台を押しながら、病棟の談話コーナーにご主人と二人で座ったそう。『けななんだか？』と女性。なあ、タンポポのお茶、飲んどったのになあ」とご主人。ほんとにかあ」と女性。この話を聞いた時、何かがひっくり返り、ほどこけ、腑ふに落ちるものがあつた。誰も、宣告も告知も告げることもしていない。夫婦の間で、三つの短い台詞せりふが交わされただけである。ご主人は、ちゃんと告げるのでもなく、伝えたわけでもなかった。これは「伝える」ということだ、と感じた。伝える」と「伝わる」はどう違うのか。伝えるは他動詞、伝わるは自動詞。苦労を共にした夫婦の間には、II「伝わる」という自動詞の豊かな世界が残っていたのだ。この時から、III「告げるのが正しいのか、隠すのが正しいのか」という

問いは、少しずつぼくの中から消えていった。

徳永進 どちらであっても 6「より一部改編」

問1 波線部①「イバった」のカタカナ部分を漢字で正しく書きなさい。

問2 傍線部I「この体験は一つのことを考えさせた。」とあるが、筆者にはどのような体験だったと考えられるか、もっともふさわしいと思われるものを一つ選びその番号をマークしなさい。

- ① 医者と患者との信頼関係が何よりも大事であるということを知った。
- ② 嘘をつくにも、「瞬」の迷いが生じた、医者としてはあつてはならない姿勢を反省することになった。
- ③ いくら嘘をついても病気に敏感な患者には通じないということを知り知らされた。
- ④ 精神的に追い詰められた病人の恐るべき洞察力を思い知らされた。
- ⑤ がんであることを「告げ」なくても「伝わる」という現象があり得ることを知る契機になった。

問3 傍線部II「伝わる」という自動詞の豊かな世界」とは具体的にどのようなことを言っているのか、もっともふさわしいと思われるものを一つ選びその番号をマークしなさい。

- ① 民宿の女性と主人の会話には、主人の伝えたい切実な気持ちがあつたということ。
- ② なあ、タンポポのお茶、飲んどったのになあ」という主人の言葉は、がんになぞえての二人の努力が無効であつたことが、おのずと伝わるもの

であったということ。

③ 民宿の女性と主人の会話には、伝えたいからこそ伝わるという自動詞的現象が生まれていたということ。

④ 苦労を共にしてきた夫婦の間には、お互いに隠すことなく 伝える「習慣が身についているということ。

⑤ 民宿の女性と主人の会話にあつての「けなんだか?」との女性の問いに、すでに女性の切実さを伝えるものがあつたということ。

問4 傍線部Ⅲ 告げるのが正しいのか、隠すのが正しいのか」という問いは

少しずつばくの中から消えていった。」とあるが、どうしてそうなつたのか、もっともふさわしいと思われるものを一つ選びその番号をマークしなさい。

① 告げる「も 隠す」も他動詞にはかならず、かつどこまでも 上下語的要素をもっており、好きになれないから。

② 伝える」という他動詞の範囲内で思考する限り、告げる「も 隠す」もやはり同じ他動詞であつて、そこには、患者さんにたいする、愛情をもつた対応ができないことに気付いたから。

③ 自動詞の豊かな世界がある限り、他動詞によるコミュニケーションは限定的で、狭い範囲内でのみのやりとりになつてしまふことが明確になつたから。

④ 患者さんに対して、医者としての責任ある態度は、やはり明確に 告げる「のが正しいし、 隠す」のも正しいありかただと、確信したから。

⑤ 告知「すべきかどうかといった他動詞的思考を超えたところに、 伝わる」という自動詞の豊かな働きの存在に気付き、 告げる「べきか 隠す」

べきかといった思考の呪縛から解放たれることになつたから。

問5 次に掲げる文の動詞のうち、自動詞にあたるものはA 他動詞にあたるものはBとして分けなさい。

- ① 道を歩く ② 苦痛を味わう ③ 手がふれあう

第三問 次の本文を読んで、以下の設問に答えなさい。

ルナールとヘミングウェイ、それにサロヤンも加えて、父と子の絆きずなという永遠の主題につきまとわれた作家の一生は、あたかもそれ自体が人間的感動を呼ぶ物語のようである。ヘミングウェイもサロヤンも、それぞれ息子が率直な思スラッい出を綴っている。五十代で 俗物フオニとなり 偽物フオニと化し、六十歳を過ぎて老いることに失敗したと書かれているヘミングウェイとは反対に、ルナールは四十六までしか生きなかった。また、作品ではあのように美しい家族愛を謳うたいながら、実人生ではついに一個の父親たり得なかったというサロヤンとも違って、ルナールはどうか家庭の建設をやりとおせた。彼の悲劇はアあまりにも早く老年がやつてきたということであらう。

『だんじん』 博物誌』以後も、ルナールは短編や戯曲を書き、文壇での活動を続けはする。だがそれにもまして彼が精力を注ぐのは、二十三歳の時からつけてきた日記である。とりわけ父と兄と母の死を記録したくだりなどには、鬼気迫るようなものがある。結局、この『日記』が彼の最大の作品になるが、その代償として彼の創作の息の根を止めることにもなった。日記にとり憑つかれて他のものが書けなくなつたのか、何も書く気がしなくて日記に閉じ籠こもつたのか、いずれにせよ日記という断片的な形式は彼に似合つていた。死の一月ほど前の『日記』には、もう死の匂いがするような、こんな一節がある。

昨日、ファンテック 長男の愛称、医師」が私を聴診した。彼が私の背中のあちこちに耳を当てたとき、二人して気違いみたいに笑った。彼は二度も三度もやり直さなくてはならなかった。肺には異常はない。心臓が肥大している。弁膜に疾駆音が聞こえるという。それが私の笑いをとぎらせる。せがれがおやじに死の宣告をするのか？」

あくまでルナールらしいが、ここで彼の笑いは消えている。短く書くことが命をも縮めることになる、一つの痛ましい典型を見るようである。

むろん、そういう極端な作者の作品を、いわゆる小説ではないとして斥けることは容易であろう。そんなことはルナール本人もつくに承知していた。彼はすでに二十代で、小説の新しい書き方、それは小説にこしらえないことだ」と考へ、十年後には ある一つの真実が五行を超えたとたんに、もうそれは小説になつてゐる」とまで極言するようになっていた。前者はまだ新人らしい宣言とも聞こえるが、後者はもはや小説の否定に近い。しかも、この二つの考え方は蛇が自分の尾を呑むようなもので、どこまで行つても堂々めぐりである。

私は、ルナールはもともと小説がそれほど好きではなかったのではないかと思う。彼は昔愛読したモーパッサンにも、だんだん飽き足りなくなつて行つたようである。モーパッサンは現実を十分に近くから見なかった、おおよそのところでは済ませた、本当らしき」ぐらいで満足してしまつた、と見るようになる。自分は観察」する、おおよそ」ではなく A」を、本当らしき」ではなく

本当」を求めると言いたかつたのであろう。ついでに、彼は 想像するものには何の味もない」とも言っている。

物を書くとは、ほとんどつねに嘘をつくことだ、という考えは早くからルナールにあった。自分自身のそれを含めて、人間の虚偽を彼のように激しく憎んだ作家の目に、世間の多くの小説が嘘っぱちに見えたのは当然であるが、その信念

は彼が晩年、父親と同じ村長に選ばれてからいっそう強まつた。農民たちのあまりにも遅れた生活を肌で知つていた彼には、農民を 小説」に書くのは彼らを侮辱するようなものだという気持ちがあつた。彼の郷土には、小説になるような目ざましい 物語」はなかつたからである。彼がいわゆる小説を拒絶した Bな理由と言つていいだろう。

事実、『どう焔のぶどう作り』にある 『フィリップ家の流儀』などを読むと、ルナールが異例の愛情といたわりの気持ちで農民たちに接してゐたことが感じられる。

彼が生来小説に向いていなかったのか、年とともに小説が嫌いになつて行つたのか、それはどちらでもいいことである。仮にその小説嫌いの作者が、文学の嘘、小説の嘘を極力排して書いた子供は、少しも子供らしくなかった。親や兄弟も虚偽の部分の隠し切れなかった。文壇のからくりも同業者の正体もつとに明らかである。そして、それを作品に、日記に書いた本人も息が詰まつた。真実を愛しすぎ、また自身の生活を愛しすぎたあまりに、彼は文学者としては 手ひどい罰を受けたようである。

ルナールが死んだのは日本の年号でいえば明治四十三年、国木田独歩が死んだ翌々年、志賀直哉が 網走まで『剃刀』 かみそりなどを発表した年である。このあたりから、大正年間をはさんで昭和の初めまでが、わが国の短編小説が最も隆盛をきわめ、技術的にも一段と飛躍した時代であると言われる。森鷗外 阿部一族 大正二年、正宗白鳥 天江のほとり、芥川竜之介 羅生門 同四年、菊池寛 身投救助業 同五年、葛西善蔵 予をつれて 同七年、宇野浩二 蔵の中・室尾屋星 幼年時代 同八年、内田百閒 冥途 同十年、 C 西椒魚 同十二年、梶井基次郎 檸檬 レモン 同十四年、 D 伊豆の踊子 昭和元年、嘉村儀多 業苦・崖の下 がけ 同三年」と、いま年表からざっと拾つて並べ

ただけでも、いかに多くのすぐれた短編が書かれたか、また書かれようとしていたか見当がつく。事実、菊池寛は大正八年に『短編の極北』という文章でこう言っている。

大間の世界が、ウはんぼうになり、藤椅子によりて小説を耽読し得るような余裕のある人が、だんだん少なくなった結果は、五日も一週間も読み続けなければならぬような長編は、ようやく廃れて、なるべく少時間のあいだに纏まった感銘の得られる短編小説が、隆盛の運に向かうのも、必然な勢いであるのかもしれない。

とにかく、退屈な二百枚も三百枚もの長編によって、読者の忍耐を不当に要求するよりも、短編小説のほうが、たとえ愚作であっても、読者にそうした被害を及ぼさないだけでも勝っていると思う。」

サローヤンと同じことを、菊池寛はその五十年も前に言っていたのである。この年、彼は『懣懣の彼方に』と『藤十郎の恋』を発表して文名も上がったところ、その口ぶりも自信ありげである。右に名前を挙げた短編作者の中で、文字どおり最も「話」に富んだ一人が彼である。講談とか浪花節とか、勧善懲悪とか割り切り過ぎとか言われるが、彼の短編はやはり面白い。面白い話を、さばさばした調子で、単刀直入に語ったものとして類がない。

しかし一方には、気の利いた話術、しやれた文体を持ち合わせながら、面白い話には用がなくなつて行つた芥川のような例もある。芥川は最後の年(昭和二年)に谷崎潤一郎と、『話』のある小説か、『話』のない小説か、というような論争をしている。そのとき志賀直哉の『焚火』などと並んで彼の頭にあったのは、当時岸田国士によって初めて翻訳、紹介されたばかりのルナールの小品であった。ただ、それも彼の目にはせいぜい「最も純粋な小説」としか映らず、ルナールという作者もセザンヌが絵画の破壊者であつたように「小説の破壊者」である、とい

うぐらいにしか見えなかったのである(『文芸的な、余りに文芸的な』)。気の弱くなった病人が言っていることではあるが、無残な誤解と言ふべきであろう。当のルナールからすれば、芥川は何は信じなくても小説と小説家の文壇だけは信じていたのだから、のんきなものだとも言えたであろう。

私などが年少の頃まず幻惑され魅了された、初期の鬼才縦横の王朝物やキリシタン物から、芥川はすでに遠いところにいた。『鼻』(大正五年)を褒めた漱石もとうに世を去っていた。志賀直哉を賛美しながら、晩年の『螢気楼』など彼の言う『話』のない小説は、薄化粧の下に貧血にあえぐ、痛ましい表情を見せている。追い詰められて書き遺した『歯車』は、葛西善蔵のような作家からは初めての『小説らしい小説』のようにさえ言われた。

芥川の僚友であつた菊池寛は、短編隆盛の気運をいち早く察知したが、同時に、短編小説が本来の面白さから逸脱しようとしていることにも敏感に気づいたにちがいない。大正十一年、多くの作者が短編の技術を競い合っているとき、彼は『文芸作品の内容的価値』という一文を文壇に投じて、反駁を受けたり失笑を食(く)つた。それは、うまいうまいと思しながら心を打たれない作品がある、かとおもうとまずいまずいと思いがら心を打たれる作品がある、してみれば文芸作品には芸術的価値の他に内容的価値といったものもあるのではないか、また芸術的評価の他に道徳的評価や思想的評価も必要ではないか、とあらましそういう意見であつた。

菊池寛の意見は、いま読んでも少しも古びていない。彼は俗論とあしらわれるのを承知で、あえてそれを書いたのである。昨今の小説は芸術的か何か知らぬが大人には面白くない、物足りない、人生を感じさせないと言つたのである。

彼のモットー「文芸は経国の大事、私はそんなふうに考えたい。生活第一、芸術第二」(同上)も「二十五歳未満の者、小説を書くべからず」(『小説家たらんと

する青年に与う』大正十年）もみな根は一つである。

そういう菊池寛のほうがよほどルナールに近かったと言える。しかも彼は唾を吐きかけ合いながら、握手しているような」（『文芸時評』 文壇ほど、人気の陰悪な所は他にはあるまい）（『文芸閑談』 というような文章を、日記ではなく堂々と天下の雑誌に発表するところが、ルナールよりはるかに明朗であつたと思われる。

阿部昭 短編小説礼賛』より一部改変

問1 空欄 A に入れる語として最もふさわしいものを次の中から一つ選び、その番号をマークしなさい。

- ① 真実 ② 曖昧 ③ 明瞭 ④ 正確 ⑤ 適当

問2 空欄 B に入れる言葉として最もふさわしいものを次の中から一つ選び、その番号をマークしなさい。

- ① 芸術的 ② 道徳的 ③ 思想的 ④ 個人的 ⑤ 社会的

問3 空欄 C D に入れる作者名を次の中からそれぞれ一つ選び、その番号をマークしなさい。

- ① 川端康成 ② 太宰治 ③ 横光利一 ④ 志賀直哉
⑤ 井伏鱒二

問4 空欄 E に入れる語句として最もふさわしいものを次の中から一つ選び、その番号をマークしなさい。

- ① 失ったり ② 買ったたり ③ 催したり ④ 得たり

- ⑤ 売ったり

問5 傍線部ア あまりにも早く老年がやってきた」理由として最もふさわしいものを次の中から一つ選び、その番号をマークしなさい。

- ① 日記に死の匂いがあるような記事を書いていること。
② もともと小説がそれほど好きではなかったということ。
③ 小説家でありながら父親になり、家庭の建設をやりとおせたこと。
④ 日記という断片的な形式にとりつかれてしまったこと。
⑤ 短い小説を極限まで追い求め、書くこととしたこと。

問6 傍線部イ 手ひどい罰を受けた」とはどういうことか。最もふさわしいものを次の中から一つ選び、その番号をマークしなさい。

- ① 想像力が豊かすぎて、小説の構想がまとまらなかった。
② 小説に真実を求めたが、描くに十分な事実を実生活に見いだせなかった。
③ 人間の虚偽を激しく憎んだので、創作に行き詰まった。
④ 小説を書くことを否定したので、村長に選ばれてしまった。
⑤ 小説に真実を求めすぎたために、反対に小説が真実らしく見えなかった。

問7 傍線部ウ はんぼう」を漢字で書きなさい。

問8 問題文の内容と一致するものを次の中から一つ選び、その番号をマークしなさい。

- ① 菊池寛は、短編の技術を競い合うだけでなく、内容的な価値にも注意を払うことを求めた。

- ② ルナールの考える小説とは、現実そのものを写し出すのではなく、想像したものの中に真実を写し出すことである。
- ③ 芥川は晩年によりやく自己の資質にあった「話のない小説」に到達することができた。
- ④ ルナールは短編・戯曲・日記など、さまざまなジャンルに挑戦したが、結局は見るべき成果はなかった。
- ⑤ 菊池寛は自己の理想とする小説像をルナールに求め、それを実現したのは友人の芥川であった。

体育進学センター

【解答】

第一問 問1 ㉠、問2 ㉡神無月、問3 ㉢ちようず、問4 ㉣、

問5 ㉠、問6 ㉡、問7 ㉢、問8 ㉣、問9 ㉤

第二問 問1 ㉠威張 つた、問2 ㉢、問3 ㉣、問4 ㉤

問5 A ㉠、㉢、B ㉡

第三問 問1 ㉠、問2 ㉡、問3 C ㉢、D ㉣、問4 ㉤

問5 ㉢、問6 ㉣、問7 ㉤繁忙 もしくは煩忙

問8 ㉠

【解説】

第一問

問1 国士舘大の入試ではしばしば文学史が出題され、しかも文学史分野の配

点が満点の1/4程度に上ることもさらである。古典からも近代からもま

んべんなく出題されるが、古典に関しては 平安時代の国風文化確立期、

鎌倉時代、江戸時代元禄期』の人物と事績については頻出である。松尾芭

蕉と言うと、東北を歩いて旅しながら句を詠んだ 『おくのほそ道』が有名だが、海を渡った旅をしたことはない。つまり九州や四国には渡ったことがない。

問2 丹の異名』については、たとえば高校の国語科で用いる国語便覧などを参照し、覚えることを勧める。月の異名を手書きで答えよ、というの

はしばしばこの大学で出される問題のボタン。むかも、なぜか旧暦十月が問題に出ることが多い

問3 ちようず 手水』とは、手洗いや顔洗いをする際に用いる水のこと。転じてそうした行為を指す場合もある 古風にトイレのことを指す言葉が手

水』である。お手洗い』という言葉にもそれは残っている。また、神社

本殿や寺院の本堂の手前にある手洗い場のことをも ちようずば』ともいう。でみず』という場合もないわけではないが、握り飯や寿司を握る前に

手のひらを湿らせる水のことを指して でみず』ということのほうが多い。

問4 結論を言うと、現在わたしたちが用いている暦 太陽暦、もしくはグレ

ゴリオ暦』と、俳句の季語を収録する歳時記で用いる旧暦 太陽太陰暦』

とでは、時期にズレがあり、ここではその知識を問うている。八月にいく

ら気温が三十度台後半に達していようと、いくら陽ざしがきつかりうと、

太陽暦でいう八月八日ごろの立秋を過ぎれば、俳句の世界は 秋』なので

ある。したがって八月初旬に見ごろを迎える 朝顔』も、台風のことをさ

す 野分』も、旧暦ではお盆の入りにおこなわれる七夕 (天の川)』も秋

の季語である。

問5 ㉡ ㉢ ㉣ ㉤ ㉥ ㉦ ㉧ ㉨ ㉩ ㉪ ㉫ ㉬ ㉭ ㉮ ㉯ ㉰ ㉱ ㉲ ㉳ ㉴ ㉵ ㉶ ㉷ ㉸ ㉹ ㉺ ㉻ ㉼ ㉽ ㉾ ㉿

よる歌集。㉤ ㉥ ㉦ ㉧ ㉨ ㉩ ㉪ ㉫ ㉬ ㉭ ㉮ ㉯ ㉰ ㉱ ㉲ ㉳ ㉴ ㉵ ㉶ ㉷ ㉸ ㉹ ㉺ ㉻ ㉼ ㉽ ㉾ ㉿

問6 ㉠ ㉡ ㉢ ㉣ ㉤ ㉥ ㉦ ㉧ ㉨ ㉩ ㉪ ㉫ ㉬ ㉭ ㉮ ㉯ ㉰ ㉱ ㉲ ㉳ ㉴ ㉵ ㉶ ㉷ ㉸ ㉹ ㉺ ㉻ ㉼ ㉽ ㉾ ㉿

完成させよという問題。これを四字熟語で言うなら 花鳥風月。日本の自

然の美しさは移ろいゆくことのなかにある。花も鳥も 小渡り鳥、風も

月も、当然に雪も季節の移ろいの中で姿を変える。ちなみに 雪月花』を

由来とするのが、宝塚歌劇団のクラス編成 雪組、月組、花組』である。

美しいものを指す言葉でもある。

問7 虚をつかれる』——油断していて隙をつかれるという意味の慣用句。

思ってもみず、はっとする』というような意味でもよいかもしれない。

自然美だけが季語の対象ではなく、人間の想像力までもが季語になり得るというのは思ってもみなかったということだろう。

第二問

問8 冬に雨が降る。比較的温暖な気候である。ということ。京都とて、決して冬に暖かいわけではないのだが、雪国と比較すれば、雨が降るだけまだ温暖なのである。脱文を良く見よ。京都を基準とすると、もっと寒い北国の現状とはどうしてもずれが生じる。

問9 ① 後に残る妹」という記述がまちがいの。宮沢賢治は死にゆく妹を看取ったのである。

② 「慎むべきだ」という記述がまちがいの。

③ 「霽」がまちがいの。夏にも降る。

④ 雨上がりに虹がかかるからだ」がまちがいの。記述ナシ。

問1 漢字問題を手書きで解答せよ、ということ。正確な字を書くことが出来るか、ということを受験生に要求しているのである。したがって、終筆のハネをしつかり書き表さねばならない。威張る」という字には、おあつちえ向きのようにハネが含まれている。わざわざこの字を選んで出題したといっても過言ではない。対策はいたってシンプルである。普段からこまめに書くしかない。

問2 ポイントは二点。一点目は指示語「この体験」が何を指すかということである。指しているのは直前箇所の内容である。二点目は、この内容を正確に言い換えた選択肢は何かということである。女性がなぜ死を迎えるしたく」に取り掛かったか。自分はどうすぐ死ぬかもしれない」ということが分かったからだ。筆者は「死に至る可能性が高い」ことを隠したにもかかわらず、である。この内容を正確に言い換えたものは、どれか。

第三問

問3 傍線部を含む一文をよく見よ。設問箇所の直前に「夫婦の間には」とある。では、夫婦の間に残っていた豊かな世界」とは何か。さらに内容をたどると、夫婦の短い会話があり、民宿の女性」が「死にゆく」といふことが「死にゆく」といふことをはつきりと言わなくとも本人や夫に伝わっているのである。これは問2の内容とも対応している。

問4 正確な言い換え、つまり同意表現をとりなさいというのがこの問題の核心である。告げる」／隠す」という対義語は同時には成立しない。つまり一者択一の関係が解消して、問題が解決するという内容を正確に言い換えてある選択肢は、どれか。

問5 自動詞目的語を必要としない動詞、他動詞目的語が必ず必要になる動詞。目的語は名詞指示代名詞指示語格助詞とくに「を」「に」「へ」等」というかたちをとる。①③の選択肢を私は「動詞」という形に置き換えてみればよい。私は味わう」だけでは、何をだよ」とツツコミたくなる。ということは、文として不十分なのである。

問1 (XでなくY) XとYとは対義語の関係である。この式を当てはめて考えるのであれば、A は おおよそ」の対義であるという見当が立つだろう。ちなみに、真実↑虚偽、明瞭↑曖昧」という対比関係となるだろう。

問2 文中の同意表現から空欄と対応する語の言い換えを類推することが出来るかどうかを導き出すポイントである。空欄を含む一文と同段落、出だしの一文中物を書くとは、ほとんどつねに嘘をつくことだ」彼には、農民を「不説」に書くのは彼らを侮辱するようなものだ」彼がい

わゆる小説を拒絶した **B** な理由…… 嘘をつく——侮辱する」

↓ だから小説を拒絶する——嘘をついたり 人を侮辱することをとがめるのは 道徳 モラル に反する」からである。

問3 近代文学史を覚える際のポイント——作家 作者——代表作——所属した文学グループ——の三点セットである。井伏鱒二 田中春樹、川端康成 伊豆の踊子——いずれもメジャーな作家と作品である。

問4 失笑を買う——という慣用句を完成させよ、というのが設問要求の核心である。ことわざ・四字熟語・慣用句 イディオム はいずれも 一字一句を正確に覚えておくこと。

問5 一文すべてを見よ——彼の悲劇は、あまりにも早く老年がやってきたということであろう。——これに対応する 同意表現である。一文を、文中から見つけばよい。あくまでルナールらしいが……ではじまる段落を見よ——

短く書くことが命をも縮めることになる、一つの痛ましい典型を見るようである——悲劇——痛ましい——老年がやってきた——命を縮めた。さらにいうと 短く書く——短い小説を……——本文中の同意表現——設問箇所——解と

いうのが、おおよそ国語 古文 漢文も含む——の問題の仕組みなのである。

問6 これも一文すべてを見よ——真実を愛しすぎ、また自身の生活を愛しすぎたために、彼は文学者としては手ひどい罰を受けたようである。——「どういふことか」と問われているのであれば、同意表現 本正確に言い換えたものを解とすればよい。

問7 漢字は暗記が物を言うという受験生 困ったことに先生でさえ が多いのだが、暗記しただけではどうにもならないということに早く気付いた方がよい。仮に次のように設問箇所を含む文を解析してみよう——大間の世界が **はんぼう** になり、以上 **と**する、…… **余裕**のある人が、だんだん少なくなつ

た 以上 **と**する——ここで意味上は **と** **と** となつていふことに気づくだろうが、**と**が平叙文 肯定文、**と**が否定文 余裕……ない」となっている。ここで **はんぼう**——というのが 余裕 の対義語であることが類推できる。つまり **忙しい** のである。したがって **繁忙、煩忙**——という語が適切だといふことがこれで判断できる。つまり、漢字問題というのは、空欄問題と同様のものなのである。

問8 本文に書いてあることが正解であり、本文には書かれていないことは解とはなりえない。

② 想像したものの中に真実を写し出すこと——が誤り。真実を書くとして、それを道徳上書けないものだから苦しんだのである。問2、問5の問題の解を使えばよいのである。

③ 筆者自身は芥川に『話のない小説』の資質があったとは述べていない。誤りである。

④ 結局は見るべき成果はなかった——が誤り。筆者は日記について評価している。

⑤ 菊池寛はルナールに言及しているわけではない。ルナールと似ているというのは筆者の意見である。しかも、芥川はルナールを大きく評価しているわけでもないので誤り。